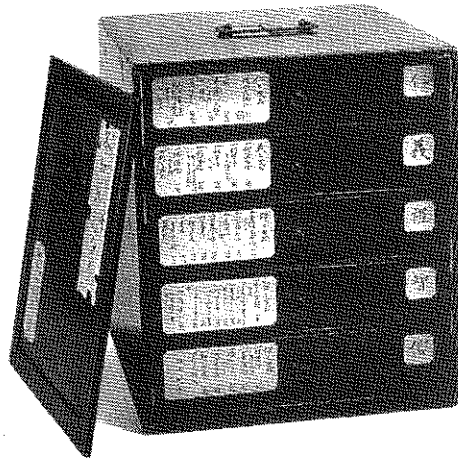


茶の湯文化学会会報 No.56

第56号 / 2008年3月27日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

「予楽院茶杓箆筒」について、水谷川紫山氏の「予楽院茶杓箆筒稿」(『予楽院公茶杓箆筒』淡交社)に詳しい。これによれば、茶杓箆筒の大きさは、幅二



「予楽院茶杓箆筒」
(淡交社『予楽院公茶杓箆筒』より転載)

京都の陽明文庫は、五撰家筆頭の近衛家に伝えられた、重宝の数々を所蔵することで知られている。その中に、江戸時代中頃の当主、予楽院近衛家熙が集めた三十一本の茶杓を収める「茶杓箆筒」があることは、これまた茶の湯の世界ではよく知られている。

予楽院茶杓箆筒と東本願寺達如

山田哲也

七・二cm・高さ三十・三cm・奥行三十・三cmで、蓋は摺食、桐材溜塗であるという。一度拝見したことがあるが、品の良い小箱という印象を持った記憶がある。

箆筒の引出には、上から仁・義・礼・智・信と墨書された紙が向って右側に貼られ、つまみを挟んで左側には、それぞれの引出に入れられた茶杓の目録が書かれた紙が貼り付けてある。ところで、「仁」の引出の目録紙の後西天皇の茶杓の一つに「一无上覚院へ永借写トアル書付 一包」、常修院宮の茶杓に、「嘉永六年二无上覚院様へ御借進ノ書付 一枚」とあり、「永借写」とある書付には茶杓の見取図と袋についての簡単なメモがあり、「御借進」の書付には、「嘉永六年七月朔実 筒三常印有之 茶杓一筒无上覚院様江御借進」とある。つまり无上覚院という人物に茶杓箆筒の中から二本の茶杓が貸し出され、戻ってこなかった様子が見て取れるのである。

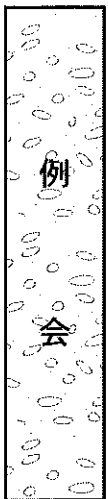
嘉永六年(一八五三)当時近衛家から、しかも予楽院の茶杓箆筒から茶杓を借り出すことのできた无上覚院とは一体誰であろうか。紹介者の水谷川紫山氏は、光格天皇皇女勝宮をその无上覚院に宛てておられる。確かに宮の院号はそうではあるのだが、文政十年(一

八二七) 五月六日に二歳で没しておられるのでこの場合該当しない。

ところで「智」の箱に目を向けると、无上覚院同様茶約筆筒から金森宗和の茶約を借り出した人物がいる。それは「東本願寺光朗僧正」である。光朗僧正は文化九年(一一八二)と文政八(一一八二五)の二度にわたり、茶約筆筒の茶約を借り出している。この東本願寺光朗僧正とは、東本願寺第二十世達如のことである。達如については紙数の都合上詳述しないが、安永九年(一七八〇)生まれ、諱を光朗。二度の本願寺諸堂焼失を乗り越え、本願寺再建に尽くした門主である。慶応元年(一八六五)没。実はこの達如の諡号が无上覚院なのである。文化・文政の門主在職時代に光朗僧正と書かれた達如は、弘化三年(一八四五)の譲職・退隠以後は何と呼ばれたのだろうか。

宮内庁書陵部に所蔵される「鷹司家等茶会記」に嘉永元年の鷹司政通自筆会記「城南館茶会記」・「同所庵茶会記」の八月二十三日の客に「无上覚院僧正」が記載されており、達如の後室が政通の姉であったことから、この无上覚院も達如と考えられるので、達如が譲職後は生前、既に院号で呼ばれていたこと

委員の選出方法等が議論され、委員を理事会構成員から三名選ぶことを決めるとともに、次回理事会で影山福会長が内規改良案を提示することとなった。要望が出ている高知支部認可問題についても議論され、結局、例会の参加費徴収は可能とするが、四国在住会員から独自に支部会費を徴収することは認めないという条件で、高知支部を名乗ることを容認することとなった。会員増強(広報・内容充実)、異分野交流(茶業関係・人文系学会)、海外交流(中国・ベトナム)などについてもさまざまなアイデアが提示され、今後積極的に進めていくことになった。



東海例会

(平成十九年六月二十二日)

「『煎茶』と『点茶』」——上田秋成の『饗式』論をめぐって」

村井康彦

上田秋成(一七三四—一八〇九)が大坂から京都智恵院前へ移り住んだのは寛政五年(一七九三)のことで、その翌年には煎茶書『清風瑣言』を上梓している。以後秋成は、文化

がわかる。さすれば、嘉永六年に予楽院の茶約筆筒から、後西天皇と常修院宮作の茶約を借り出した无上覚院とは、東本願寺第二十世達如光朗と考えられよう。

それではなにゆえ、本願寺門主に茶約筆筒の茶約が貸し出されたのであろうか。これには東本願寺門主が、第十二世教如以来、近衛家と猶子(ゆうし)関係を結んでいることが、大きく作用していると考えられる。この猶子とは、平安の頃より行なわれていることで、基本的に相続を目的としないで、仮に結ぶ親子関係の子の称をさす。要するに近衛家と東本願寺門主とは擬制的親子関係にあったのである。このような関係にあったからこそ出来た行為ではなかったのではないか。さらに達如の前室が近衛経熙の娘熙子であり、後室の鷹司政熙の娘依子も経熙の養女として嫁いでおり、達如の室を巡って近衛家とは二重の縁で繋がっているのである。また一方には達如の茶の湯愛好という事実があげられよう。文久元年(一八六一)二月二十六日に枳殻邸露庵で行なわれた、達如の法嗣殿敷の裏千家入門返礼の茶会には、達如好の木地中棗が使用されている。このように茶器を好むほどの茶の湯愛好者であった達如であるからこそ、近

六年に没するまでの十数年間、京洛における煎茶界の中心にいた。いわゆる文人煎茶人秋成についての研究は早くからなされて来たが、その多くは、かれらが煎茶を賞揚する一方、点茶に対しては厳しい批判を行なったという論調に終始しており、京都に移住してからの秋成の言説に微妙な変化が生じていることを見逃している。

というのは、第一に、京都へ移ってから秋成は、著述のなかで義政・珠光・紹鷗・利休など、いうところの点茶家にしばしば言及するようになることで、これは点茶に関する知識を得たことの反映であろう。

第二は、それと対応するように「法式」「饗式」をつよく意識するようになってきていることである。点茶が法式、形にとられ過ぎていられることを指摘し、これを「茶奴」とまでいって批判した秋成が、煎茶についてこのような発言をするようになる。

第一(煎茶は)饗式たたねば芸技の名なし。思へば食飲は日々の雑口(事か)、法たたずこそあれ。

食飲は「日々の雑事」であるからそこには法則も規矩もない。したがって「法式」のない煎茶は「芸技」——芸術といつてよいである

衛家側でも茶約筆筒からの茶約貸し出しということに対応したのではなからうか。

理事 会

平成十九年度第三回理事会が、十二月二日(日)午後二時より、池坊短期大学で行われた。

まず、各行事の報告が担当理事よりあり、例会関係では、来年度からの東京例会の会場として五島美術館を候補としたい旨報告され、理事会の承認を得たので正式に交渉に入ることになった。研究会では、一回目の中国福建省で行なわれた研究会実績と、二回目を鹿児島開催で計画している旨との報告があった。会報では、誤植を避けるため、発表者に発表概要をデータとFAX(六〇〇〇〜二〇〇〇字)で事務局に送って頂くことになった。会誌は、十四号と十五号の進捗状況が報告された。つづいて、いくつかの議題について討議が行われた。まず来年度大会については、一月の代表理事会で内容を決め、三月開催の理事会で正式決定することとなった。役員選出法については、影山副会長から内規案の説明があり、会長候補者選定委員会の結成時期、

うーにならない、と。秋成は点茶・煎茶の違いをこえて、喫茶という日常的行為が芸術になるためには「饗式」を立てることの必要性に気づきはじめていたことを知る。

最晩年の秋成は饗式・法式という、文人煎茶人にとってタブーであったテーマに手をかけようとしていたのである。化政期以後の文人煎茶は否応なしに逢着する「饗式」論を抜きにしては語れない。

近畿例会

(平成十九年十二月一日)

「近世後期の本願寺御用商人にみる『芸能』の姿——猪上七郎右衛門の能と茶道——」

井上秀二

猪上家のあった京都下京区旧寺内町には、古くは西本願寺(以下本願寺)に勤務する僧侶・商工業者が住んでいた。その中で本願寺御用商人の猪上家は、御供物司、本願寺の報恩講や宗主一族の遠忌・年忌の御華束、御遷座御祝餅等を作る御華束役を勤めていた。なお本願寺での身分は御賄奉行支配下にあった。

猪上家十代で今回取り上げた正貴は寛政二一年に生まれる。文化三年、十七歳で本願寺に見習出勤し、父と同様に剃刀御用役として門

主の補佐役も勤めた。かれは稼業の傍ら能と茶の湯も嗜んでいる。能に関しては、三十歳になった文政二年、本願寺よりワキ方を仰付られ、文久二年まで一月に催された本願寺の節会や九条家等の能会でワキ、ワキツレ、地唄を七十一歳まで続けた。

茶道に関しては、文政八年に三十六歳で敷内流茶道に入門した。嘉永三年に還暦を迎え、正月九日に敷内家の初釜で初めて点前を務める。元治元年七月二十日、蛤御門の変による京都大火で、七月二十日、敷内家の茶室「燕庵」を含めて家屋を類焼する。慶応二年正月九日、再建された茶室「談古堂」において、正貴は、冠棚に唐物大海茶入で唐物点前を行なっている。さらに正月二十七日、茶室「雲脚」の席開きには真々斎竹崎の点前に客として招かれた。慶応三年、再建のなった茶室「燕庵」に本願寺大御所（広如上人）、新々斎様（徳如上人）が訪問する。正貴も敷内紹興の点前で参会した。明治二年に八十歳となり、本願寺から二代限りの茶道格隠居と生涯一人扶持を頂いている。

本願寺には專業の能役者と茶道役がいたにもかかわらず、正貴が能と茶道を嗜んだことから、かれ自身が有能な勤仕者であったこと、

後に広岡家の所蔵となった。この茶碗には、平瀬家・鴻他家の茶碗と競った浪花の茶碗比への逸話が残し、紅葉具器の中でも随一と言われている。

「唐物文琳茶入 銘若草」は、肩から胴へと緩やかに膨らみ「林檎」の異名である「文琳」の名にふさわしい小壺である。全体は明るい鉛色の釉薬で肩先からV字状の置形があり、その露先は、ほんのりと瑠璃色を帯びている。後陽成天皇は「薄く濃き野辺の緑の若草にあとまで見ゆる雪のむらさえ」の和歌を想起され、「若草」の勅名を得た。また、本光国師が所持していたことより「國師文琳」の名もある。茶道具の名称の由来や歴代の所有者など茶入のたどった歴史はともに箱に収められている種々の品により知ることができ、この茶入には、茶入の売渡状、由来記、有栖川幸仁親王による和歌懐紙が共に伝わる。立花実山による由来記には後藤呈乗から大賀惟要の元へ伝わる。この時に有栖川幸仁親王がこの茶入の話聞き、密かに宮中へ携えさせ、東山天皇が茶入をご覧になった。この時、幸仁親王は名の由来となった宮内卿の和歌をしたためたという。

以上のように道具には、仕覆や箱、時には

本願寺の御用商人の間で、身分の高下なく芸能が嗜まれていたこと、などが窺われる。

東京例会

（平成十九年四月二十一日）

「泉屋博古館分館の茶道具 春季展 茶道具―付属品とともに楽しむ―にやせて」

両角かほる

泉屋博古館は住友家が蒐集した美術品を保存、展示する美術館として、財団法人として昭和三十五年に発足し、昭和四十五年には現在の京都鹿ヶ谷に、平成十四年には東京六本木に分館を開設した。所蔵品の中でも、住友家十五代住友吉左衛門友純（号・春翠）が明治中頃から大正期にかけて蒐集した中国古銅器と鏡鑑は世界的にもその名が知られるが、この他、中国・日本の書画、洋画、近代陶磁器、茶道具、文房具、能面・能装束など、極めて多様である。中でも茶の湯の道具は、特に唐物に優品が多くみられる。その中から、泉屋博古館分館の春季展によせて作品を紹介したい。

「小井戸茶碗 銘六地藏」は、やや小振り、見込みの奥行きが深くゆつたりとした姿で、遠州愛玩の小井戸茶碗の代表作として知

その由来などが書かれた添状などがともに伝わる。これらの付属品を道具とともに鑑賞することにより作品が歩んできた歴史や道具に対する思いも展示を通じて感じ取っていたければ幸いである。

「千利休の誕生」

中村修也

□『山上宗二記』の記事と『千利休由緒書』千利休の名前については、「幼名与四郎、宗易・抛筌斎と号す。利休は居士号」（角川茶道大事典）とするのが一般的である。そして、幼名与四郎と宗易・抛筌斎という号については問題とされず、もっぱら話題になるのは「利休」号の成立時期である。

しかし、今回問題とするのは名前の方ではなく、「氏」いわゆる「姓」の方である。「千」という姓はいつ成立したのかという問題、そして宗易がいつから「千宗易」となったのかという問題を検証してみたい。

天正期の史料で、比較的、信頼度の高いものとして、『山上宗二記』があげられる。その『山上宗二記』には、「関白様被召置当代之茶湯者」として、「田中宗易」「田中紹安」の名前が記されている。何故、「千宗易」「千

られる。全体が枇杷色釉で内外に飛沫のような青釉やなだれがあり、明るく変化に富む釉調の妙が見所である。高台縁に土を見せ、高台周辺や口辺から腰にかけて随所にカイラギ風の景色が見られる。

名の由来は、小堀遠州が、山城伏見の六地藏にて入手したことになむといわれている。箱書も遠州の手になる。付属の仕覆は、萌葱地に幾何学文とローマ字風の模様を織り出され、紅毛裂と呼ばれている。特に東インド会社のオランダ語の略称であるVOCの文字を組み合わせた模様が織り込まれているところが見所となっている。

「紅葉具器茶碗」は、やや薄作りだが、胴がたつぷりと張った椀形で、裾広がりやや高めの撥高台の強い張りに支えられた端正な姿をしている。胎土が赤く、透明釉を通してその赤みが鮮やかに発色するため、紅葉を連想させる。見込みには、わずかに青みの火替わりも見られる。茶碗の側面には、斜めに四箇所、釉の掛けはずしがあり、これが独特な景色を作っている。紅葉具器の見所は、内箱蓋裏に円窓内に水墨で雁が飛ぶ秋景山水画が描かれ、松花堂昭乗筆と伝えられる。この茶碗は、元は天王寺屋五兵衛が所蔵していたが、

紹安」と表記しないで、「田中」をわざわざ姓としているのか、これまでほとんどこのとは問題にされてこなかった。

しかるに、千家側の史料である『千利休由緒書』をみると、千姓・田中姓について、次のように説明されている。

先祖より田中氏候て御座候、就中、利休祖父ハ、田中千阿弥〔初専阿弥ト号ス、大祖父ハ里見太郎義俊ノ二男田中五郎義清ガ末孫ナリト云〕（中略）田中千阿弥発心いたし、泉州堺へ閑居仕候、其子与兵衛ハ田中ノ名字ヲ改メ、父ノ名ノ一字ヲ取、名字ニいたし、千与兵衛と申候而、堺ノ今市町ニテ、商家ニ罷成候、つまり、祖父の代までは田中姓を名乗っており、父の代から商人となり、それをきっかけに祖父の名前の千阿弥の一字である千を名字としたというのである。たしかに、群馬県太田市新田上田中町（旧新田郷田中村）に田中五郎義清の子孫が今も居住しており、同所には田中山長慶寺があり、田中義清の供養塔も存在する。一見、辻褄が合い、『千利休由緒書』の記述に蓋然性があるようにも思える。

しかし、太田市の田中家に残る系図には、現在に至る田中家の人々の系譜は記載されて

いるものの、田中千阿弥や宗易との関係を語る記述はない。両者の関係は、現時点では不明とするしかない。また、『千利休由緒書』の記述が正しければ、なぜ、天正十七年の段階で、山上宗二は宗易・紹安親子の姓を、こゝとさら田中と書いたのがあらためて問題となる。

□『念仏差帳日記』と『天王寺屋会記』

宗易が千を名乗った古い史料として、天文四年（一五三五）四月二十八日の堺・開口神社の念仏寺築地修理の寄進名簿である『念仏差帳日記』があげられる。そこには十四歳の「与四郎殿 せん」という記載がある。これを見る限りでは、宗易は十四歳の頃から千を名乗っていたと思われる。

ところが、『念仏差帳日記』の記載をみると、「名前十屋号」という記載方式になっている。宗易の所属する今市町の分を見ても、「五郎左衛門殿あまのや」「次郎左衛門殿ちこや」などと、「名前十屋号」方式で記名されている。つまり、「千」は姓ではなく、屋号の可能性が高いということになる。さらに「凡諸名物」という名物記には椛宗理が「ムクや宗理」と記載され、同書に「先之宗久」なる記述もある。また、『山上宗二記』の記

〇年（二六一五）下限の堺環濠都市遺跡、寛文六年（一六六六）に富田川の氾濫で水没した富田城下町の富田川河床遺跡などから出土したのである。出土傾向は十六世紀後半までの初期出土地は主に戦国城館で、日本では三島と呼ばれる粉青沙器や印花文の皿が多く見られる。十六世紀後半から朝鮮陶磁の出土量が増えて全国的な広がりを見せ、斗々屋手・蕎麦手のような文様のない粗末なものが増加する。十六世紀末から十七世紀初期までは大阪城などの武家屋敷から官窯産の堅く焼き絞まった白磁ではなく、地方窯産の軟質白磁が多く見られる。

慶南の地方窯製品をみると、十五世紀窯の製品は象嵌青磁から粉青沙器へ、粉青沙器から白磁へ移行する様子が窺え、胎土や釉調が良質化される。十六世紀窯では粉青沙器から白化粧をしない灰青沙器の出現と軟質白磁が増加する。十七世紀窯では軟質白磁と同じ耐火性の高い白土と釉がかけられた新たな硬質白磁が出現する。粗質刷毛目粉青沙器は十五世紀後半から製作されるが十六世紀前半にはほとんどが消滅し、十六世紀初期には末期粉青と灰青沙器、粗質白磁と良質の軟質白磁が作られ、灰青沙器は十六世紀半ばまで続く。

載も、天王寺屋に対しては千、津田に対しては田中という対応関係が見出せる。こうしたことから、本姓は田中であり、千は屋号と推定される。そして、分家や、まだ家督を継いでいない段階の家人に対しては、本姓の田中ではなく、屋号である千を名乗らせていた傾向が茶会記から見出せる。

結論を急ぐと、千が姓になるのは少庵の代からと考える。少庵は宮王家出身である。宗易の養子となって以後は、屋号である千を名乗ったはずである。ところが宗易は切腹となった。宗易亡き後、京都で茶匠として生きる決心をした際、田中姓を名乗るわけにもいかず、かといって宮王姓では茶匠として生きにくい。そこで屋号であった千を姓として千少庵が誕生する。これによって義父も田中宗易から千宗易となり、「千利休」が誕生したと考えるのである。

（平成十九年五月二十六日）

「高麗茶碗の日本請来について」

徐景淑

高麗茶碗とは朝鮮半島から請来された茶碗であり、室町時代以後わび・さびの茶器として大変珍重されたのである。その作行きによつ

これに対して日本の出土状況は、十六世紀前半から後半の遺構を中心に粉青刷毛目が出土し、十六世紀前半から半ばまでは軟質白磁が数点見られるが本格的に出てくるのは十六世紀末から十七世紀初にかけてである。灰青沙器は堺環濠都市遺跡から十五世紀後半から十六世紀半ばの遺構から数点出土するが、十六世紀後半以降出土量が増える。

慶南地方の窯では十六世紀初から末期青磁、粗質白磁、灰青沙器、軟質白磁が全部作られており、日本にも十六世紀初からこれらが全部見られるものの、十六世紀前半には刷毛目粉青が、十六世紀後半には灰青沙器、十六世紀末には白磁が大量に出土する傾向がみられる。従って、請来時期については製作時期と日本請来時期の差はほとんどなく、リアルタイムで動いていたと考えられるが、消費地の好みが作用したからか種類別に使用された時期には差があることが解る。

次に請来経緯について考えてみたい。

朝鮮初期、倭人に対する交隣政策として、太宗七年（一四〇七）に薺浦（セポ）と富山浦（プサンポ）を貿易港として開港するが、中宗五年（一五一〇）に三浦倭乱が起きたため、薺浦倭館は閉鎖される。中宗七年（一五

て雲鶴、狂言袴、刷毛貝、粉引、堅手、雨漏、井戸、蕎麦、斗々屋、熊川、柿の帯、呉器、玉子手、御所丸、彫三島、伊羅保、金海、御本と分類される。日本に近隣する慶尚南道地方は、高麗茶碗の中に「熊川」「金海」の地名が付けられたことと当時日本との交流が多かったことなどからその生産地とされているが、窯跡はまだ見付かっていない（一）。それで、慶尚南道窯の出土品と日本内で朝鮮陶磁出土傾向を考察し高麗茶碗の請来時期と請来経緯について考えてみたい。朝鮮陶磁の出土品から高麗茶碗を見分けすることは困難である。彫三島や狂言袴のように特長があるか、茶道具と一括して出土しない限り作行きが類似するだけで用途が茶碗であるとは断定できない。しかし、ここでは作行きの説明を容易にするため高麗茶碗の分類名を使うことにしたい。

高麗茶碗を含む朝鮮陶磁は天正元年（一五七三年）に織田信長によって滅ぼされた一乗谷朝倉氏遺跡、天正四年（一五七六）から天正一〇年まで存続した滋賀県安土城下町遺跡、天正十四年（一五八六）が下限の大分県大友遺跡、天正十四年（一五八六）に築城され、一六〇二年に改築された小倉城遺跡、慶長二

一一）には倭人の居住を認めない条件で再び薺浦鎮を設置し開港されるが、三九年（一五四四）に薺浦倭館でまた乱を起こしたため、倭館を富山汝浦に移して薺浦倭館は廃止される。薺浦港は慶尚道に位置し、開港以来倭人の数が増え続け、燕山君九年（一五〇三）には居住人が二千人に上り、倭館が設置され、周辺には熊川邑城、薺浦鎮城、熊川倭城が建てられたのである。

一九九九年薺浦水中木柵の発掘調査により、薺浦港の東側から一五〇点余の陶磁器が引き上げられた。この木柵は中宗五年（一五一〇）に起きた三浦倭乱以後倭寇の侵入を防ぐため設置したもので、採集陶磁器は十四世紀末から十六世紀前半までに編年できる。申叔舟の『海東諸国記』に描かれた「熊川薺浦之図」に見られるように採集場所である東側付近には倭館が位置し、周辺には倭人の集落もある。また、現場で戦闘関連の遺物が見付からないことから薺浦は交易の場であるとされ、これらの陶磁器は交易品であった可能性が高いと指摘されている。当時日本人の行動範囲が規制されていた事実から考慮すると高麗茶碗も薺浦倭館付近の窯から注文、または購買して日本へ渡ったのではないかと推測できる。

(1) 井戸茶碗の産地とされる鎮海市熊川郡頭洞里窯が二〇〇一年発掘されたが、盗掘などで窯の破損が激しく、井戸茶碗の様式は少量収集された。

「茶陶と青山二郎『何を見つけたのか?』」

竹内順一

竹内氏の発表は、昨秋(二〇〇六年九月一日)十二月十七日)にMIHOミュージアムで開催され、今夏(二〇〇七年六月九日)八月十九日)世田谷美術館で開催される「青山二郎の眼」展に即した発表であった。希代の美術品鑑賞家と評される青山二郎の蒐集品に対して、竹内氏は、「美術作品の見方」という真つ向からの挑戦を試みた。

○印象を第一義とする(受け身な)見方

○「読む」「解説する」見方↓「見えるもの」の分析

○鑑賞的な(本質理解と称する青山二郎の)見方

○Connoisseurshipとしての見方

○Aphorismとしての見方 警句・箴言・簡潔

鋭利な表現という五つの視点から美術品を鑑賞する方法論を論じ、青山二郎の眼が絶対的ではない事を、我々に教えてくれた。(文責・

中村修也)

(平成十九年七月七日)

「デジタルアーカイブ手法 茶碗の断面から」

関口敦仁

これまでのデジタルアーカイブ研究の成果の一部として、茶碗のアーカイブと洛中洛外図のアーカイブ表示システムなどを中心に紹介し、比較形態学などによる芸術性の定量化の可能性などデジタルアーカイブの今後の課題について発表した。

本研究の取り組みとして、デジタルアーカイブはより効果的な表示利用の目的にもとづいて、計画ははじめの段階からアーカイブに取り組むべきであると考え、いくつかのプロジェクトを進めて来た。アーカイブが展示された際に鑑賞者に対象となる美術品からだけでは判断および評価不可能な情報を解析し、どのような視点によって、どのように情報提供が可能であるか、その成果の制件と研究を行っている。

茶碗のアーカイブを初めたきつかけのひとつは、現代作陶の芸術性と茶の湯における茶碗の違いについて検証できないだろうかとい

うことであった。茶を飲むという行為を茶の湯の道具として考えれば、茶を飲むことに集中させる道具としての機能が備わっていると考えることは可能であろう。人間工学的に見れば茶碗の理想は手のひらに載せ、重すぎず、回すことで振り回されず、また、自然と手の中に馴染む位置が私たちの中に理解できる。

かたちは実用性を保ちながら鑑賞性を損なうことはない。鑑賞性によって実用性が損なわれることは、使用する価値観によって、その判断基準の振れ幅はあるが、御点前において選択された茶碗がどのようなものなのかは主人のその席での価値観の現れなのだろう。

このような視点から、医学用のCTスキャンを利用して、茶碗の断面図を撮影し、かたちを再構成し、光造形モデルを作成した。断面図から道具として何が優れているのか、また、芸術品として何が美しいかたちと共存させているのかについて検討した。

厚みの均一性から、轆轤をまわしてからの変形であったり、外観から想像できない薄さで構成されていたり、また、ひびや割れに対する補修の仕方などが判断できた。

茶碗のCTスキャンによる撮影はおもに二つの展覧会に向けて立ち上げられたプロジェ

クトでおこなった。「峰の紅葉」、「破れ袋」、

本阿弥光悦「七里」、「わらや」、いずれも

五島美術館蔵、荒川豊蔵、鈴木蔵、岐阜県美

術館蔵、黒織部、個人蔵をこれまでアーカイ

ブした。

データから作られた光造形モデルは手に取っ

て、掌への納まりや操作感を体験して、感覚

的なアーカイブを行って頂ければと考えてい

る。

このような研究によって、芸術行為におい

て人間でしか修練できない技術的表現要素と

いうものについても明らかにされると思われ

る。しかしながら、どのようなかたちや振る舞

いが美をつくりだす原因となるのか解ってい

くとしても、それによって、人間がこれまで

作り出してきた芸術行為と同じような成果と

しての美を作り出すとは限らないのである。

研究すればするほど、美の様々な階層に分

かれた複雑さとそれをいかに単純に構成する

かという、相反する要素の凝縮が美しさを生

み出していることが理解される。そのような

意味ではわたしたちは本物の美と美に限りな

く近いがそうでないものを判断できる能力を

修練する必要もあるのではないだろうか。

デジタルアーカイブ技術によって、そんな

能力も明らかにされてしまいかと心配される方もおありであろう。しかしながら、研究を通して、美を構成する要素の多さを見るにつけ、ますます人間の創造的能力には複雑な階層が同時にたくさん存在することを実感し感心させられる。

平成二十年度大会予告

前号まで募集しておりました平成二十年度茶の湯文化学会大会の発表者につきましては、ご応募にもとづき、研究発表の内容が以下のようにになりました。ご応募ありがとうございました。当日スケジュールの概略も含めお知らせいたします。

日時 六月十四日(土) 午前十時半

場所 主婦会館プラザエフ

(東京都千代田区六―十五)

JR四ツ谷駅より徒歩一分)

(午前の部)

開会挨拶

研究発表

① 「『君台観左右帳記』の熊(能)皮蓋

は、カメ(玳瑁)か?クマか?」

岩田澄子氏

② 「茶研究の先駆者・諸岡存の生涯と茶

業文庫について」 岩間眞知子氏

③ 「篠山藩・藩政日記にみる茶道頭の役

割と煎茶の導入」 橘倫子氏

昼食休憩

(午後の部)

総会

研究発表

④ 「茶の湯の釜の煮え音についての一考

察」 岡本文音氏

⑤ 「幕末明治期における茶道史の位置付

け―伊勢国松坂・本居信郷の史料を

中心として―」 市村祐子氏

シンポジウム

「江戸・東京の茶の湯を考える」

小堀宗実氏

川上紹雪氏

森田晃一氏

(司会) 田中秀隆氏

懇親会

例会のご案内

東京例会（会場 五島美術館講堂 午後二時

）

日時 四月二十六日（土）

演題 「茶の湯にみる『常』についての一考察

—『茶話抄』を中心に—

布埜千加子氏

演題 「未定」

福島修氏

日時 六月二十八日（土）

演題 「松花堂昭乗の絵画と近代美術 —特に

小堀遠州像との関係について—

依田徹氏

演題 「近代茶道の歴史社会学」

田中秀隆氏

日時 七月二十六日（土）

演題 「再考 中興名物」

砂澤裕子氏

演題 「未定」

高橋忠彦氏

日時 九月二十七日（土）

演題 「唐物香合について」³

多比羅菜美子氏

演題 「未定」

追川吉生氏

日時 十一月二十九日（土）

演題 「古渡り更紗展によせて」 佐藤留美氏

演題 「特集陳列『茶人が好んだデザイン』彦

根更紗と景德鎮』を振り返って—茶陶
としての明の五彩・染付の位置づけを
考える—

三笠景子氏

日時 一月三十一日（土）

演題 「貴人と相伴者—茶室編—」 岩田澄子氏

演題 「墨蹟研究」

名児耶明氏

東海例会（会場 名古屋文化短期大学アセン

ブリ・ホール 午後六時）

日時 四月二十五日（金）

演題 「文化人井伊直弼と埋木舎—茶道を中心

として—」

大久保治男氏

演題 「竹川竹斎『川船の記 巻五』」

岩田澄子氏

日時 六月二十七日（予定）

日時 九月二十六日（予定）

近畿例会（会場 池坊短期大学第一会議室

午後二時）

日時 七月十二日（土）

演題 「近代女子教育における奥田正造が果た

した役割について」

布埜千加子氏

演題 「未定」

山田哲也氏

日時 十一月十五日（土）

演題 「『仏日庵公物目録』と『天目』の由来

「再考—天目真跡と清拙正澄の墨蹟—」

岩田澄子氏

高知例会（会場 高知県立文学館慶雲庵茶室
午前十時）

日時 六月二十二日（日）

内容 「茶の湯文化学会平成二十年度大会の研

究発表をテーマとしたシンポジウムと

茶会」

このほか、一般の方々が茶の湯に親しんでも
らうための茶席を、毎週日曜日を主体（十時
～十六時）に同所で設けます。

発表者の募集

近畿例会での発表者を募集しております。
ふるってご応募下さい。ご応募いただける方
は、学会事務局まで発表テーマをお知らせ下
さい。

後記

学会のホームページが更新されております。
例会のご案内や研究会の開催などについても
随時お知らせ致します。ぜひホームページも
ご利用ください。